



ズ貴族 転生記

最下位

異世界に転生した元ゲーマーは
ハズレスキルで無双する

2

こはるんるん

ill. ふつー

◆ ◆ ◆

KUZU

kizoku

◆ ◆ ◆

◆フィアナ◆
王国随一の名家の令嬢。
ヴァイスの元婚約者で
学園最強の生徒。

◆エレナ◆
ヴァイスの妹にして「剣聖」。
学園ナンバーワンの
実力を持つ。生真面目な性格。

◆ヴァイス◆
本作の主人公。
元廃ゲーマーの男がゲームの
クズ貴族に転生した姿。
原作知識を活かして
死亡エンド回避を目指す。

◆セリカ◆
ローランド王国の王女。
高貴な振る舞いから、
学園中の生徒の憧れの的。

◆アレン◆
救国の勇者。
お人好しで、悪を許せない。
逆境に強い。

◆レオナルド◆
生徒会副会長であり、
学園で二番目の実力を持つ。
ヴァイスを敵視している。

◆ジゼル◆
「七公爵」と呼称される
七体いる大魔族の一族。
学園に潜伏している。

CHARACTERS

一章 最下位クズ貴族、学園五位になる

「昨晚【グロリアス・デュエル栄光なる決闘】が行われました！ 勝者、ヴァイス・シルフィード。彼は二年生のギルベルト・ステイングに代わり、【グロリアス・ランキング栄光なる席次】五位に昇格します！」

妹のエレナ、王女セリカと登校したタイミングで、俺の序列が上がるという校内アナウンスが盛大に流れた。

ちなみにこのアナウンスは、人工精霊じんこうせいれいによって行われている。

俺が通うこのグロリアス騎士学園は、魔族の侵攻しんこうからローランド王国を守る騎士を育成する場所。魔族とは魔物を使役しえきし、人間を喰らう人間の天敵。

そんな存在に對抗できる人材を育てるべく、学園では強さを絶対視しており、生徒同士を自主的に切磋琢磨せつさくまさせるシステムを導入じゅうにゅうしている。

それがこの、【シヨウベツ栄光なる席次】という序列だ。

これによって、全校生徒が学内の成績によって順位付けされている。

また、それだけでなく下位の者が上位の者を【シヨウベツ栄光なる決闘】という双方合意のもとで行われる決闘によって倒すと、順位が入れ替わる。

それゆえに、この【栄光なる席次】の順位こそ、生徒たちの最大の関心事だった。

何しろ、ランキング一位になった際のメリットが破格だ。

一位になると、この国最強の戦士である国王への挑戦権が得られる。

そこで国王に勝てれば、男子生徒は王女セリカとの婚約を許されるし、女子生徒は褒美として国王からなんでも願いを叶えてもらえるのだ。

たとえば、国王との対決で敗れたとしても、国王の覚えがめでたくなり、その後の出世に大きく影響する。だからこそ、みんなが躍起になって、学園ナンバーワンを目指している。

「バ、バカなあああッ！」

「あの最下位クズ貴族が、一気に【栄光なる席次】五位だって!」

「二位のレオナルドに迫る勢いじゃないか!? これは、十二日後の【栄光なる決闘】は、ひよっとすると、ひよっとするんじゃないや!」

学園は俺の噂で、持ちきり状態だった。阿鼻叫喚に近いような叫びが、沸き上がっている。

俺はそんな光景に圧倒されつつも、感慨に耽る。

こんな状況、転生当時からじゃ想像できなかったな、と。

そう、かつて日本に住んでいた俺は事故で家族を失い、天涯孤独のゲーマーとして生きていた。だが、やり込んでいたゲーム【グロリアスナイツ】の世界の、作中屈指の嫌われ者——クズ貴族の

ヴァイスに転生して、ここまで成り上がったのだ。

ゲームシナリオ上のヴァイスは、自身の重量を重くするハズレスキル【超重量】を授かったことで腐ってしまい、学園最下位の成績を修め、留年までしてしまった。

それだけではない、視きにスカートめくりなど卑劣な行為を繰り返し、周囲のキャラからも大いに嫌われ、『クズヴァイス』なんて呼ばれるように。

その結果、最終的には闇落ちして魔族となってしまう、勇者アレンに殺されてしまうんだ。でも、そんな運命は御免だと思った俺はシナリオを改変するために動くことにした。

ゲームをやり込んでいたからこそ知っている事実ではあるのだが、実はヴァイスのスキルは自分を重くするだけでなく、進化させれば触れたものの重量も操れるようになる、壊れスキル。

インパクトの瞬間だけ得物の重量を増して威力を増大させる、なんて使い方をすれば破格の性能を実現できるのだ。

おまけにヴァイスは魔法の才能もある。速さ×重さのコンボを極めれば、作中最強の実力を身につけることだってできる、そう思ったのだ。ゲーム知識があるから、どうステータスを育成すればいいのかや効率的なレベリングの方法も知っているし。

そして実際に努力を始め、俺はめきめき力をつけ、学園の生徒からも見直されていた。

かつて俺を嫌っていたエレナにセリカ、そして元婚約者で学園ナンバーワンの実力を持つ生徒会長、フィアナとも仲良くなれた。セリカに至っては、恋人関係にまでなってしまうている。

……ややこしい話ではあるが、俺はシナリオを改変してハッピーエンドを迎えるためにセリカと建前上の恋人契約を結んだつもりだった。しかし、勘違いが重なった結果、彼女は本気になってしまったようなのだ。

彼女の母親は国王付きの侍女だった。

その元侍女と娘であるセリカをこの国の王妃が恨んでいる。

王妃の子供は幼くして死んでしまい、その代わりに王位を継ぐセリカが許せないのだ。

そして現に王妃はセリカの母親を毒殺している。

それを勘づいており敵討ちをしたいと考えているセリカと協力しやすくなるために俺は父親の前で形だけ、告白紛いなことを言った。

セリカもその言葉が場を収めるための言葉だとわかっているだろうと思って。

今さら俺からの告白は勘違いだったなどと告げると、セリカとの関係が破綻し、俺はおろか学園が壊滅状態になる恐れがあるため、ジゼルを倒すまで、今の関係でいることにしているんだよね。

だから、破滅を回避することに成功したら、セリカにすべて正直に告げようと思う。

それまで、セリカとは、ピュアな関係でいようと心に決めていた。

ともあれ、昨日の魔族化したギルベルトとの戦いは、死闘と呼べるほどに大変だったな……

この世界には【七公爵】と呼称される七体の大魔族がいる。

そのいずれかと契約することで、人間は魔族に生まれ変わることができるわけだが……そのうち

の一人である、絶世の美少女【傾国】のジゼル。

彼女は変身能力を持つ上に、【傾国】のスキル能力で異性を洗脳状態にすることができる。

ジゼルは王妃の手引きで現在学園内に忍び込んでおり、手駒を増やしているわけだが、

【栄光なる席次】五位のギルベルトも操られてしまった。

彼の洗脳を解き、ジゼルの尻尾を掴むために戦ったわけだが……途中でジゼル本人が出てきてギルベルトを魔族化してきたもので、なんとかギルベルトの洗脳を解くことができた。

ジゼルは取り逃がしたものの、なんとかギルベルトの洗脳を解くことができた。

その最中で僕はギルベルトと【栄光なる決闘】を行い、序列を上げたんだ。

それにしても、感慨深くはあるが疲れも感じる。

魔族の討伐を旨とする機関——ブレイズ公爵家の魔族狩り部隊から、遭遇した大魔族ジゼルについて深夜まで根掘り葉掘り聞かれたせいで、寝不足なのだ。

ちなみに、フィアナはブレイズ公爵家の跡取り娘であり、この部隊を動かせる立場にある。

「あっ、ヴァイスさん！あの学園五位のギルベルト先輩にどうやって勝ったんですか!?」

新聞部の女子生徒が俺の姿を見つけると、突撃取材をしにきた。

「ヴァイスがやってきたぞ!」

「お、お前、中身も外見もまるで別人じゃねえか、一体、何があったんだあ!？」

さらに、わっと生徒が俺を取り囲み、周囲に人垣^{ひとがき}ができる。

注目度の高さに驚^{おどろ}いてしまいが、考えてみれば致^{いた}し方がないことかもしれない。

五位は、もはやナンバーワンの射程^{しやてい}圏^{けん}内^{ない}なのだから。

するとエレナが、誇^{ほこ}らしげに前に出た。

「みなさん、お待ちください。ヴァイス兄^{にい}様^{さま}は、【傾国】のジゼルを撃退^いし、魔族化したギルベルト先輩を倒すという偉業^{いぎふ}を成し遂^とげたため、とても疲れておられるのです」

「なっ、何い……!？」

周囲の生徒たちは、目を丸くした。

どうやら俺が【栄光なる席次】五位に上がったことしか、まだ知らされていなかったようだな。

「故に、質問ならこの私が受け付けます。兄様にご負担をかけないようにお願いします」

エレナは俺のために、この場を取り仕切ろうとしてくれていた。

俺にはもつたないくらいよくできた妹だ。

「ありがとうエレナ。だけど、重要なことだから俺の口から、ちゃんとみんなに伝えようと思う」

「は、はい。兄様が、そうおっしゃるなら!」

エレナは素直^{すなお}に引き下がった。

すると、新聞部の女子が食い気味^{きみ}に尋^{たず}ねてくる。

「け、【傾国】のジゼルを撃退した!? それにギルベルト先輩が魔族化したとは、どういうことで

すか!？」

「お前、すご過ぎじゃないかよ! 本当にヴァイスかあ!？」

生徒たちは、さらに熱狂^{ねつきまう}した。

俺は、冷静に説明する。

「ギルベルトは、ジゼルによって魔族にされたばかりだったから、セリカの解説魔法で、人間に戻せたんだ。二年生のマリウスもジゼルに洗脳されたんだが、奴の洗脳も解いた」

そう、セリカは魔族の力を無効化できるスキル【聖女】を持っている。

故に、セリカはジゼルに命を狙われているんだよな。

俺の解説に、生徒たちから大きなどよめきと、歓声が上がった。

「そ、そんなことが!？」

「本当のですか、セリカ女王!？」

「そうよ。かなり危なかったけど、私とヴァイス君の愛の勝利よね!」

セリカがそう言って、俺にしなだれかかってくる。

唐突^{たうたつ}のことに俺は「ちょ……!？」と声を漏らす、気を取り直して言う。

「そ、そういうことだから、安心してくれ! ジゼルが何か仕掛けてきても、俺たちがいれば対抗できる。ジゼルは一年生の女子に化けているから、ちよつとも怪しい奴がいたら、俺か生徒会長のフィアナに相談してくれ!」

とにかく重要なことだけを叫んだ。

ちなみにジゼルが一年の女子に化けているというのは、ゲーム知識だ。

ただ、ゲーム内ではただのモブ生徒だったので、特定まではできないのだが、それでも有用な情報ではあるはずだ。

「ちょ、ちょっとお待ちください。それじゃ、ヴァイスさんは、この短期間で二体もの魔族を討伐したと!? しかも、ギルベルト先輩は助かったって、前代未聞の手柄じゃないですか!?」

新聞部の女子が、ずいっと身を乗り出してきた。

確かに俺は転生してすぐの頃、魔族化した学園の先輩を倒し、セリカを救った。

それを考えれば、今回は二度目。

結構すごいことなのかもしれない。

「はい、しかも、その場には【傾国】のジゼルもいました。しかし、ヴァイス兄様の仕掛けた罠にはまったジゼルは、慌てて逃げ帰ったのです」

えっへんと、エレナが胸を反らしてそう言った。

「ジゼルを確実に倒すために、ブレイズ公爵家の魔族狩り部隊を呼んでおいたわけだが……残念だけど、今回はそこまでは叶わなかったな」

まだ、ゲーム序盤だ。

俺たちの実力も、ジゼルを倒せる域には達していなかった。

次のチャンスに賭けるとしよう。

「す、すごい! ああいくつもの国を滅ぼした【傾国】のジゼルをあと一步のところまで追い詰めたなんて!」

新聞部の女子生徒は、興奮気味にメモにペンを走らせる。

生徒たちの俺を見る目も、明らかに変わった。

「その通り。僕からも、感謝を捧げるよヴァイス」

涼しい声と共にやってきたのは、元学園のナンバーファイブ、ギルベルトだった。

洗脳状態を解かれたギルベルトは、いかにも優男といった風体だ。

生徒たちの視線が、ギルベルトに一斉に注がれる。

これは俺にとつても少々、意外だった。

ギルベルトは昨晚、俺たちと死闘を演じたばかりだった。

「お前、もうブレイズ公爵家の取り調べは終わったのか?」

「ああ。あらゆる検査、取り調べを受けて、僕が人間であること。ジゼルの洗脳は解けていることが証明されたよ」

ギルベルトは肩を竦めてみせた。

「その上でファイナ会長が、僕を学園に戻すことを強く推奨してくれたのさ」

「その通りですわ!」

取り巻きの女子生徒たちを引き連れて、真紅の髪をさつそうとなびかせながらフィアナもやってきた。

彼女は今日も、太陽のごとく輝かしい存在感を放っている。

「フィアナ会長、おはようございます！」

「おはようございます、みなさん」

生徒たちが一斉に頭を下げて、学園の女帝フィアナにあいさつした。

フィアナは扇を口元に当てて、優雅にあいさつを返している。

俺も彼女に、軽く会釈をしておいた。

エレナとセリカも俺に倣うが、二人はフィアナに思うところがあるのか、フィアナを見る目はやや陰しかった。

何しろフィアナは俺の元婚約者で、昔、俺を一方的に振っておきながら、再び俺と婚約したいなと言ってきたからな。

妹のエレナはそれが許せないようだし、セリカも俺を奪われまいと対抗意識をメラメラ燃やしている……なんだかいたたまれない。

もっとも、【傾国】のジゼルを倒すのには、フィアナの協力も必要不可欠だから、俺としては良好な関係は保っておきたい。

「ギルベルトさんには、【傾国】のジゼルを倒すため、わたくしの命令に絶対服従という条件で、

学園に戻っていただくことになりましたわ。今は奴に対抗できる、信頼できる戦力が必要な時ですからね」

「……なるほど、それは心強いな」

ギルベルトは本来のゲームシナリオでは、ジゼルに洗脳され、主人公の勇者アレンを倒すために、自爆して死ぬキャラだった。

どうやら、俺の行動で、未来は確実にいい方向に向かっているようだ。

ともあれ、油断大敵ではある。

ここはゲームとは異なりセーブもロードもできない現実世界なのだから。

シナリオ改変は順調だが、同時にそれはこの先、何が起これるか、予想がつかなくなることを意味している。

「みなさんも、ご安心なさい。ジゼルの暗躍は、このわたくしとヴァイスさんが防いでご覧に入れますわ。いずれ近いうちに、ジゼル討伐の報告をお知らせすることになりますでしょう！」

フィアナの宣言に、生徒たちがわっと沸き立った。

ブレイズ公爵は、信頼する跡取り娘のフィアナにジゼルの討伐を一任した、ということか。

「あっ、副会長！」

「レオナルド先輩、そのお姿は!?」

そんな中、一部の生徒の視線が校門に集中した。

「ヴァイス、き、君がまさかランキング五位になるうとは……！」

苦々しい声と共にやってきたのは、【栄光なる席次】二位の三年生レオナルド・リーベルトだった。

その制服は、超エリートに似つかわしくなく、汗と泥で汚れていた。顔には擦り傷まであった。レオナルドはセリカの婚約者の地位を狙っており、何かと突っかかってくるんだよね。そしてなんならその結果、俺と【栄光なる決闘】をすることが決まっている。

【栄光なる決闘】の勝者は敗者に、事前に取り決めた要求を吞ませられるからな。

奴は、学年最下位のクズ貴族だった俺が、セリカの恋人になったことが許せず、俺を退学に追い込もうとしているんだが……なぜに、こんなにもボロボロなんだ。

「ふふっ、レオナルドさんも、ヴァイスさんに負けじと、自分を追い込んでいるようですね」
フィアナが愉快げに微笑んだ。

「当然です、フィアナ会長……獅子はウサギを仕留めるのにも全力を尽くすと言います。油断などリーベルト公爵家の名折れ。何より、僕の目標はランキング一位のフィアナ会長であり、その先の国王陛下との対決まで見越しています。ヴァイス、君との対決など通過点に過ぎん！」

俺を睨んだレオナルドの目は、言葉とは裏腹に俺への対抗心に燃えていた。

「……わかりました。いい勝負にしましょう。レオナルド先輩」

学園ナンバーツーのレオナルドが、ここまで本気になっているなら、俺としても油断はできない。

「その心意気やよしですね、レオナルドさん。ヴァイスさんとの対決が楽しみですわね」

フィアナは扇をかざして、そう激励を送った。

「この【栄光なる決闘】の勝利者が、わたくしと一位の座をかけて対決する。お二人の対決を、わたくしも特等席で観戦させていただきますわ」

「僕が負けるなど、有り得ません。ですが、ヴァイスが強敵であり、大魔族に挑む勇氣を持った誇り高き貴族であることだけは、認めましょう！」

レオナルドは鼻を鳴らすと、足早にその場を去った。

俺を最下位クズ貴族と蔑んでいたレオナルドだったが、その認識は改めたらしい。

奴の視線は、自分の花嫁になると豪語していたセリカではなく、ずっと俺に向けられていたしな。そこに大声が轟いた。

「ヴァイス、昨日は助かった！」

声の主は、このゲームの主人公であるアレンだった。

シナリオ上では彼は、セリカを救ったことをきっかけに学園に転入してきていた。

アレンが転入してきてしまえばシナリオ通りに殺されると恐れた俺は、アレンより先にセリカを助けたのだが……シナリオの強制力の影響か、彼は別の魔族を倒してその成果を以てこの学園にやってきたんだよね。

アレンは俺の父親に対して複雑な感情を抱いている。その上、俺の評判も最悪。

ってことで転入当初は突っかかってきていたんだが、この間、ジゼルにはめられて殺されそうになつていたのを助けたことで、少しか俺を認めてくれたらしい。

そんな風に思っていたのだが……

「だが、もう無様に助けられるなんてことは、二度とない！ 僕はみんなを守るよう、もっと強くなつてみせる！」

まあ、簡単に仲良し、とはいかないよな。

もつとも、以前はただ反発してきているような感じだったが、今はこちらをライバル視してきているような感じなので、そこまで悪い関係ではないように思える。

「ちっ。平民風情が、栄光ある騎士学園の制服を……！」

人垣の方から、そんな舌打ち交じりの声が聞こえてきた。

この学園は、貴族の子弟のみを受け入れてきた。そこに国王の鶴の一声で入ってきた異物——平民のアレンへの風当たりは非常に強い。

貧困にあえぐ平民が、一発逆転のために大魔族に魂を売って、魔族化して騒乱を起こす——というのがこの世界の日常である。

大魔族に貢献して手柄を立てれば、魔族の国で安定した暮らしを保障してもらえるからな。

そのため、平民は信用ならないという思想は、貴族たちにとって一般的なのだ。

こうした背景から、貴族社会では『平民は信頼に値しない』という考えが広く浸透している。

もつとも、エレナやセリカをはじめとした俺と親しい生徒たちの中にはそんな人間はいないんだけどな。

「それなら、一緒に強くなろう。なあアレン、お前も俺たちとパーティーを組んで、一緒にダンジョンでレベル上げをやらないか？」

そこで、俺は努めてにこやかにアレンを誘った。

ゲーム主人公であるアレンは、鍛えれば作中トップクラスの強さになるため、味方に引き入れておきたい。

何より、この前の戦いではアレンの助けがなければ、俺は魔族化したギルベルトに負けていただろう。その恩を返す意味でも、アレンがみんなの輪の中に入れる手助けをしてやれば、と思ったのだ。

本来のゲームシナリオでは、セリカとエレナが、アレンの味方になって、他の生徒との橋渡し役をしていたが、俺がその立場を奪う形になってしまってもいるしな……

しかし、アレンは首を横に振って俺の誘いを断った。

「……残念だけど僕はこれまで通り、一人で修業するよ。その方が、性に合っているんだ」

「むっ。ちょっと、あなた。せっかくヴァイス君が誘ってあげているのに、それはないんじゃないの？」

「その通りです！」

セリカが唇を尖らせた。エレナがアレンを見る目も厳しくなる。

「これからは私たちの仲間として精進するとおっしゃっていたじゃないですか!? あれは嘘だったんですか!？」

「もちろん、何か困ったことがあれば、僕は君たちを全力で助けるつもりだ。そのための修業を一人で行いたいだけだよ」

俺は一歩前に出て言う。

「いいんだ、二人とも」

アレンは父親を亡くしてから、極貧の暮らしの中、たった一人で己を鍛えてきた。

それがアレンにとって当たり前であり、魔物との戦闘もソロの方が慣れているのだろう。

そうでなくたって、ライバル視している相手から手を差し伸べられて素直にそれに応じられるかといった微妙なところだろうし。

……うむ、考えが足らなかったな。

「何様のつもりだ……!」

だが、そんな事情を知る由もない生徒たちは、俺の誘いを断ったアレンに対して不快感を覚えたようだった。このままでは、かえってアレンを孤立させる展開になってしまう。

俺はフィアナにそっと耳打ちする。

「フィアナ、アレンを生徒会の庶務にする……とかできないか？」

「……は？ どういうことですか？」

突然の申し出に、フィアナは目を瞬いた。

「ジゼルは、この前みたいにアレンを下僕にしようと狙ってくる可能性が高い。それとなく見張っておいて欲しいんだ」

最悪なのは、アレンがジゼルの下僕にされるバッドエンドだ。

このエンドになると、エレナとセリカも殺され、学園は壊滅する。

「わかりましたわ。アレンさんのユニークスキルは、敵に回れば厄介ですし……何より味方にいれば心強いですから」

そう答えると、フィアナは胸を反らし、高らかに宣言する。

「アレンさん、あなたにこのわたくしの小間使いとして、生徒会で働く栄誉を与えて差し上げますわ!」

……なんて誘い文句だ。

ただ生徒会の庶務に勧誘しているだけなのに、あまりに高飛車な物言いだ。しかし――

「フィ、フィアナ様の下僕にしたいだけなんて!」

「平民の分際で、なんてうらやましいの!？」

フィアナの取り巻きの女子生徒たちからは、悲鳴のような声が上がった。

下僕にされるのがうれしいなんて、俺にはよくわからない価値観だな……

「えっ？ フィアナ会長、僕は一刻も早く強くなりたいので、生徒会の仕事をしている暇はありませんが……」

アレンは面食らった様子で、これを断った。貴族社会のことや、この学園の事情に疎いのはわかるが、空気が読めないにもほどがあるだろう、こいつ。

「なっ、なななな、なんですって!？」

【栄光なる席次】八位の女子生徒、一年生のエミリアが素っ頓狂な声を上げた。

この娘は、フィアナの取り巻きの筆頭格で、フィアナを崇拜し切っている。

「自分が、誰に何を言っているのか、わかっているの平民!? 無礼にもほどがあるわ!」

エミリアは髪を振り乱して、アレンに詰め寄る。

それをフィアナは手で制して、言い放った。

「アレンさん、これはお願いではなく、生徒会長としての命令ですわ。ジゼルの罫にはまり、わたしたちの手をわずらわせた罰として、放課後の学園ダンジョンの見回りをギルベルトさんと共に行うことを命じますわ! もしダンジョン内で、魔物に苦戦している生徒がいたら、救援して差し上げるのです!」

おっ、うまい。さすがはフィアナだ。

これなら、アレンの望むレベルアップの修業を行いながら、アレンを守ることができる。元ナンバーファイブのギルベルトが一緒なら、ジゼル本人が襲ってでも来ない限り、大丈夫だろう。

「アレン、生徒会長命令だよ。会長の命令に逆らったら、この学園では生きていけないって、知っているかな?」

ギルベルトが、微笑しながらアレンを脅した。

これはさすがに大袈褌だが、あながち間違いとも言切れない。

フィアナを崇拜する連中から敵視されたら、闇討ちやら嫌がらせをされたっておかしくない。

俺は固唾を呑んでアレンの返事を待つ。

「……わかりました。罰として人助けの仕事をしろ、ということでしたら、従います」

アレンは意外にも素直に受け入れた。

真っ直ぐ過ぎるところはあるものの、魔族から弱き人々を守りたいという情熱に燃えて、騎士学園の門を叩いた、根っからの主人公気質。

生徒の救援も業務に含まれると聞いて、それならと思ったというのもありそうだ。

「ヴァイス、僕はすぐに君に追い付いてみせるからね」

アレンはそう言って俺を見に来る。

うーん、やはり、俺はこいつに明確にライバル視されてしまっているらしい。

ともあれ、ひとまずいい落としどころではあった気がする。

正直、直前スキルやステータスの育成方法を教えられるのが一番良かったが、次善の形にはなったな。それならばと、俺は助言をすることにした。

「俺より強くなりたいなら……一つだけアドバイスしてもいいか？」

「なんだい？」

「クラスは【復讐者】^{リベンジャー}を取ることをおススメする。このクラスになることで習得できるコモンスキル【ヴェンジェンス】は、アレンの【勇氣ある心】^{フレイブ・ハート}との相性が抜群にいい」

主人公であるアレンにどんなスキルビルドを施せば最強にできるか、ネット上では議論が活発に交わされていた。

そこで最も強いのではとされていたのが、【復讐者】型勇者だ。

この利点は、運用は難しいが、一発逆転の高火力が出せる気持ちよさと、序盤から必要なコモンスキル【ヴェンジェンス】を習得可能な点だった。

【ヴェンジェンス】は、MPの半分を消費することにより、相手から受けた総ダメージの十分の一を相手に返すことができるスキルだ。

代償の割に与えるダメージが低過ぎて、役に立たないクソスキルの代表格扱いされていた。

だけどHPが十分の一になると攻撃力が十倍になるアレンの【勇氣ある心】と組み合わせると、敵を一撃粉砕^{いっげきふんさい}できる凶悪スキルに化けた。

【ヴェンジェンス】による攻撃は、相手に一〇〇%ヒットする仕様なのも強い。

「できれば、これに加えて【生命力上昇】コモンスキルを習得すれば、アレンは最強になれる。騙^{だま}されたと思って【ヴェンジェンス】について、学園の図書館で調べてみてくれないか？」

アレンは俺からのアドバイスを素直に聞き入れるのか……半ば賭けだな、と思いつつアレンの返事待つ。

数秒して、アレンが言う。

「……ヴァイス、君はセリカ王女と結婚するために、ランキング一位を目指しているんだろう？ 僕を強くしてしまつて、よいのか？」

アレンは返事待つことなく俺を見据え、再度口を開く。

「僕もランキング一位を目指すつもりだ。誰よりも強くなるために」

「もちろん、アレンが強くなるのは望むところだ。むしろ、そうでなくちゃ困る」

「僕がどれだけ強くなろうと、自分の勝利は揺るがないと信じている……と？」

いや、俺の目的は、バッドエンドを回避するため、万が一にも、アレンが魔物や魔族に殺される事態を防ぐことだ。そのために、できる限り強くなつてもらわないと困るというだけだ。

だが、同時に、ゲーマーとして強敵と戦つてみたいという気持ちもあることに気付く。

最強を共に目指す相手がいるという事実は……なんというか、張り合いがある。

「そうだ。俺は誰よりも強くなつてみせる。当然、アレンよりもな」

「なら、僕は、そんな君より、さらにさらに強くなつてみせる！ いずれ、勝負を受けてもらうぞ、ヴァイス！」

アレンはそう言って去つていった。

どうやら完全に闘志に火が付いたようだ。

「ヴァイス兄様に対して、失礼な人ですね」

「……アイツは、父上に対して思うところがあるからな。多分、俺にだけは負けたくないって気持ち強いんだろう」

憤るエレナを俺はたしなめる。

「えっ、お父様に対して……？」

アレンは子供の頃、父親を魔族に殺された。

その魔族を討伐したのが、俺の父であるアルバン・シルフィードだ。

アレンは、なぜもっと早く討伐に来てくれなかったのかと、俺の父に対して、何より父親を見殺しにせざるを得なかった弱い自分に対して憤りを覚えていた。

あいつが強さを求める原動力は、この体験から来ている。

「ヴァイス、これからちよつと二人だけで話せるかい？ 大事な話があるんだ」

ギルベルトが俺の肩を叩いてきた。

「ああ、いいぞ。それじゃ、二人とも先に教室に行っていてくれ」

「はい！」

「じゃ、教室でね」

一体なんだろう？ 俺は訝しく思いながら、ギルベルトの後を付いて行った。

二章 学園の中間試験

ギルベルトに連れられてやってきたのは、誰もいない体育館裏だった。

「実は、君に告白しておきたいことがあるんだ」

「はあ？」

おいおい、学園物で体育館裏と言えば、愛の告白をする場所として有名だが、ま、まさかな……

「魔族から人間に戻った僕には、ある大きな変化が起きていたんだ」

「変化……？」

俺はホッとすると同時に、ハツとした。

「魔族化すると、保有するユニークスキルもパワーアップする。それが、人間に戻ってもそのままだったんだよ」

これはゲーム内でもあった仕様だ。

【聖女】セリカによって、魔族から人間に戻された者は、そのユニークスキルが大幅に強化された状態のままとなる。

もっとも魔族化した者は、ほぼ例外なく殺処分されるため、この状態になることは極めて稀^{まれ}なの

だが。

ゲーム内でも特殊なルートを通らないと、発生しないレアケースだった。

「僕のスキルで造ったこの【不可視の剣】を知覚できるかい？」

ギルベルトは手を掲げてみせる。

彼のユニークスキルは【不可視トランプ創造】。目に見えない罠を創り出せるレアスキルだった。
「……できないな」

俺はこれへの対策として、罠を見破ることのできる【罠破り】のCOMMONスキルを習得した。だが、魔族化し、より強力になったギルベルトのスキルによって生み出された【不可視の矢】と【不可視の剣】は、見破ることができなかった。

あの時と同じ状態であることに、舌を巻く。

「僕のスキルで創造した罠や武器は、通常、五時間経てば消えてしまうんだけど、今のところ、昨晚作ったこの剣は消えていない。もしこれが永続して消えないのであれば……意味するところは、君にはわかるだろう？」

原作ゲームでは、魔族化したギルベルトを人間に戻すことはできなかった。

だから、パワーアップしたギルベルトのスキルの真価を、今ここで初めて知った。

質量保存の法則を無視して、いくらでも不可視の武器や罠を造り出せるとしたら……えらいことだ。

「お前がいれば鍛冶屋^{かじ}いらず、強力な不可視の武器をいくらでも騎士団に配備できて、王国の戦力は激増するんじゃないか？ いや、むしろこの能力は秘匿^{ひとく}し、魔族狩りの切り札として使った方が効果的か。無論、造り出せる武器の数や、本当に永続可能なのか、検証を重ねる必要があるが……」

「へえ。さすがだね」

ギルベルトは感嘆^{かたん}の息を吐く。

「様々な可能性を考慮して、ブレイズ公爵家は後者を選んだよ。見えない武器は、究極の罠であり暗器となる。存在を悟られなければ、ジゼルのみならず、すべての魔族を出し抜く切り札として使えるというわけさ」

ギルベルトはそう言つて、【不可視の剣】を俺に手渡した。
何も見えないのに、手に確かにズシリとした重量を感じる。

「なるほど、このパワーアップしたスキルの可能性を考えれば、ギルベルトがすぐに無罪放免^{むびほうめん}になったのにも納得できるな」

王国の盾^{たて}であるブレイズ公爵家は、ギルベルトを懐柔^{かいじゆう}して利用した方が、国益^{こくえき}になると考えたの
だろう。

ギルベルトはジゼルに操られていたわけだし、彼自身に罪がないと判断されたってこともあると思うが。

「そんなことより、秘密を俺に教えてしまつて大丈夫なのか？ この能力の秘匿^{ひとく}が、お前を無罪放

免とする司法取引の条件ではないのか？」

「その通りだけど、フィアナ会長が君になら言っている、とね。君ならジゼルを倒すのにこの【不可視の剣】を有効活用してくれるだろう？　だからこれは、僕からのせめてものお礼というわけさ」

「……そうか、ありがとう。正直、助かる」

そういうことならと、俺は【不可視の剣】をありがたく受け取ることにした。
切り札が多いに越したことはないからな。

「俺に恩義を感じてくれているなら、厚かましいかも知れど、もう一つお願いをしていいか？　アレンを見守ってやってくれないか？　あいつは強くなる可能性を秘めているけど、まだ一人じゃ危なっかしい」

「もちろん。彼にも迷惑をかけたからね」

ギルベルトは頷く。

「それにしても、あのアレンを、そこまで気に掛けるなんてね。確かに、極めて稀なユニークスキルの持ち主だけ……正直、彼が魔族に勝てたのは、偶然が重なった結果だとは思えないけどな」

「俺の勘だ。あいつの力は、いずれこの王国にとって、必要不可欠になると、俺は確信している」
ゲームシナリオについて説明するわけにもいかないので、俺はお茶を濁した。

「ふっ、僕には君の方がよっぽど王国に必要な不可欠に思えるけどね。まあいい、恩人からの頼みだ。
任せておいてくれよ」

その時、授業開始の予鈴が、鳴り響いた。

「じゃあね。授業に遅れるんで、僕はこれで……」

ギルベルトはそう言って、踵を返した。

俺も急いで教室に向かうとするか。遅刻扱いにされるのは、マズイ。

風魔法で形状を精査したところこの【不可視の剣】は、全長八十センチメートルほどで見えない鞘に納まっており、背中に括り付けるための肩紐まで付いていた。

「……こんなオプシオン付きとは、ギルベルトもなかなか親切だな」
とりあえず、背負って身につけておくとするか。



「うおおおおお、ヴァイス！　落ちこぼれのお前が【栄光なる席次】五位なんて、先生は猛烈に感動しているぞー」

教室に入ってきたガタイのいい三十歳くらいの男性教師——担任のエドガーが、俺を見るなり、号泣しながら迫ってきた。

「お前がジゼルが学園に潜伏^{せんぷく}しているなんて言い出した時には、またどうしようもない悪戯^{いたずら}を始めたのか!? ド腐^{くさ}れが!」などと疑^ぎってしまった! そんな先生を許^{ゆる}してくれ!」

「ちよおっ!」

ガツシリ肩を掴まれ、ガクガク揺さぶられた。

これはたまらんと、俺は強引に後ろに逃げる。

「おっ、俺から逃れるとは、力もかなり付いたか!」

「そうですね!」

今のはユニークスキル【超重量】を使って、背負った【不可視の剣】に触れ、剣の重量を五倍にしたからできたことだ。

その状態で後ろに倒れ込むことで、エドガーの拘束^{こうそく}を破ったのだ。

俺はステータスを【速度】に極振りしているため、【筋力】そのものは強くない。しかし、物体の重量を自由にコントロールすることで、パワーの不利を完全に補うことができるのだ。

「先生はうれしいぞ!」【筋力】こそ至高! 鍛え上げた【筋力】は、決して俺たちを裏切らない!」

エドガーは、【筋力】のステータスを伸ばすことを生徒たちに強く勧めていた。

いわく、『極限状態に追い込まれた時、最後にモノを言うのは【筋力】だ!』とのこと。

【筋力】を伸ばすことを目的とした筋トレ同好会『マッスル愛好会』の顧問^{じもん}までしているんだよな。

その考え方は否定しないが、俺は【超重量】を活^いかすために、【筋力】のステータスを捨てるビルドをしているので、同意するわけにもいかず、「は、はあ……」なんて、曖昧^{あいまい}に返事をしておいた。

エドガーは満足げに教壇の方へ。

そして、口を開く。

「それじゃ、ホームルームを始めるとするか。全員、席につけ。最初にお知らせだが、五日後の中間試験の内容が、国王陛下のご意向で大きく変わったぞ」

試験の話ということで、教室内の空気がピリツとする。

「【傾国】のジゼルに潜伏され、奴の手駒にされる生徒が出るなど弛^{たる}んでいる証拠だ!」と、陛下は大変お怒りらしくてな。試験に落ちた生徒は退学処分にするのお達しが届いた」

「……はあ!? た、退学!」

「そんなバカなあ!」

成績下位の者たちが、愕然^{がくぜん}とした声を出す。

この騎士学園は、いくら成績が悪くても貴族の子弟を預かっていることもあり、退学にされることはなかった。

現にヴァイスは留年^{りゅうねん}でいていたわけだしな。

俺がジゼルの存在を暴露^{ばくろ}したことで、シナリオが変化してしまったのか……?

「驚くのも無理はないが、まあ、聞いてくれ。試験内容は、一年生全員が参加する三人チームでの魔物の討伐だ。学園ダンジョンの地下三階までの魔物に鈴すずを付ける。こいつらを撃破して、鈴を奪うんだ。開始から四時間経過した時点でチーム内で鈴を三つ以上、持っていれば合格だ。鈴の数は生徒の数の二倍。どうだ？　これなら難しくないだろう？」

「地下三階までの魔物をパーティーで討伐するのであれば、なんとかなるか……」

「普通にやっていれば合格できそうだな……」

生徒たちのそんな声が聞こえてくる。

学園内にあるダンジョンの地下三階までは、学園が管理しており、危険はほばないし、難度はさほど高くなさそうだな。

「だが、必ず一体以上の魔物を自分の手で撃破すること。チームメンバーは学園側が指定し、女子は女子同士で、男子は男子同士でしかチームを組めないこととする。別チームとの共闘、協力は認めない。もし別チームと共闘して鈴を手に入れたり、鈴を譲渡したら、その鈴は無効、没収となる」

生徒たちから再び悲鳴が上がる。

「そんなんじゃ、全員合格なんて無理よ!？」

「あつー、クソ！　エレナさんから鈴を分けてもらおうと思っていたのに!」

おいおいと、思わず突っ込みを入れたくなる。

俺の妹であるエレナは一年生ながら、【栄光なる席次】三位の才女だった。

確かにエレナに協力してもらえば、試験の突破は簡単だろうが……そんなに他人を頼りにしてどうする。

『自分の手で撃破』っていうのは恐らくトドメをさせばいいってことだから、そんなに無理難題ってことでもないだろうに。

「はあ。みんな、この学園は強者を育成する場所だぞ」

エドガーがヤレヤレとばかりに、首を横に振る。

「強いクラスメイトに頼りっぱなしじゃ、強くなれるわけがないだろう？　合格はあくまで、自分の実力で勝ち取るんだ！　もちろん鈴の数は、成績にも影響する!」

「「ぐあああああッ!？」」

みんなが取り乱す中、エレナは涼し気な表情で「望むところですね」と口になっている。

エレナなら、万が一にも落ちる恐れはなさそうだな。

「……なるほど。お父様の考えそうなことね。弱者は生き残れない。ジゼルが潜伏しているような状況じゃ、弱者は排除はじきしてやるのがむしろ慈悲じひだとか、考えているのでしょうかね」

俺の隣となりのセリカは、何やら腕組みして唸うなっていた。

「……いや、もしかすると、この試験はジゼルとその手下を炙あぶり出す狙いがあるのかもしれないぞ」

「ふうふうこと?」

俺の発言にセリカが目を瞬く。他の生徒たちの注目も、俺に集まった。

「魔物は魔族に従う性質がある。魔物は魔族を攻撃できないんだ。なら魔物と女子生徒を戦わせれば、ジゼルを見つけ出す手がかりになる。女子生徒への攻撃を躊躇う魔物がいらないか、同じチームの生徒と試験官に見張らせるんだ。不合格なら退学にされるなら、それでも魔物と戦わざるを得ない。そうなれば、何か違和感が生まれるはずなんだ」

そのために、必ず一体以上の魔物を自分の手で撃破することを合格の条件としたんだな。

「傾国」のジゼルは、目を合わせた男子を魅了して支配できるけど、女子を洗脳することはできない。つまり、このルールなら、ジゼルは手下の男子生徒の支援を受けられないってことだ。うまくすればこの試験で、ジゼルの正体を見破れるし、奴を不合格にして追放することだって、できるかもしれない」

「そうか、なるほど。さすがはヴァイス君！」

セリカはそう言ってくれるが、短時間でこのルールを考えた国王こそが傑物だと思う。

すると、エドガーが言う。

「驚いた。冴えているじゃないか、ヴァイス。その通りだ。そういうわけでみんな、魔物の攻撃を一切受けずに試験をクリアした女子がいたら、教えてくれ。逆に魔物から攻撃を受けた女子は、ジゼルではないと断定できる。教師陣も試験官として監視に当たるが、生徒にも目を光らせてもらった方が確実だ。特に女子のみんなは頼んだぞ。パーティーメンバーにジゼルが潜んでいる可能性が

ある」

「って、国王陛下もヴァイスの言う通り、一年生の女子にジゼルがいると確信しているんですか!？」

前の列の男子生徒が、そう疑問の声を上げた。

一年の女子の中にジゼルがいるっていうのは、あくまで俺だけが知っていて広めている情報。

それを国王も主張している……？

そう思ったのだが、エドガーは首を横に振る。

「いや、この試験内容は全学年共通だ。可能性を狭めて考えるべきじゃないからな」

「も、もし、ジゼルの正体を見破ったら、その瞬間、殺されるんじゃない……」

クラス内の女子たちは、そんな一人の生徒の言葉を最後に沈黙してしまった。

ジゼルの正体を探るのは大事だが、正体を見抜いたとジゼルに悟られたら、口封じに殺される危険があるというのは、確かなことではあった。

「大丈夫だ、安心してくれ。報告は、試験が終わった後で構わない。何より、教師陣を各階に配置し、何か異変があればすぐに駆けつけるようにする。みんなは俺らが必ず守る！」

エドガーがみんなを安心させるべく、胸を叩いた。それによって教室内の空気が若干和らいだ。

「俺は地下四階に下りる階段前で待機している。万が一にも、地下四階以下の強力な魔物が登ってこれないようにな。もし何かあったら、いつでも相談しに来てくれ」

「わかりました、先生！」

「エドガー先生が、ジゼルに魅了されていない限りは大丈夫ですよね」

「おいおい、俺は妻子持ちだぞ。魔族娘の色香に迷ったりしたら、嫁さんにしかかれちまうだろう？」

エドガーは生徒の言葉に対して、冗談めかして笑った。

みんなもつられて、朗らかに笑う。

原作ゲームでは、彼はジゼルに洗脳されていなかったが、この世界ではどうかかわからない。

なんなら本人の気持ちと関係なく洗脳されてしまうのがスキルの怖いところだが……まあここでそれを言うのも野暮というものか。

その時、アレンが立ち上がって、空気を読まない宣言をしてきた。

「ヴァイス、この試験、どちらが鈴を多く集められるか、勝負だ！」

クラス中が呆気にとられる。

「僕はこの五日間で、必ず君に追い付いてみせる！」

すさまじい気迫だった。

やる気になってくれるのはいいことだが……

「おい、平民。何を調子に乗っているんだ？ ヴァイスは今や、学園のナンバーファイブだぞ！」

「聞けばお前はジゼルの罠にはまって殺されかけたらしいじゃないか？」

「そもそも、お前、この試験を突破できるのかよ！」

ブーイングが起こるが、アレンは意に介していない様子だった。

「もちろん。この程度の試験は乗り越えられなくちゃ話にならない。その上で、僕はヴァイスに勝ちたいんだ」

アレンは主人公らしく、目標が高ければ高いほど、敵が強ければ強いほど、燃えるタイプだ。アレンの力を引き出すために、俺は勝負を受けることにした。

「わかった。受けて立つ」

アレンに強くなってもらいたい俺としては、闘争心を煽れる主人公のライバルポジは意外と都合がいいな。

「クソ！ 俺たちは眼中にないと言っても言いたいのか？」

「魔族にまぐれで勝ったくらいで、無謀が過ぎるぞ平民！」

生徒たちはやはり面白くないみたいだな。

そんな中、アレンがさらに火に油を注ぐようなことを言う。

「無謀だって……？ 僕はもっともっと上を目指す。【栄光なる席次】四十位程度で、満足するつもりはないんだ」

「き、貴様ッ！」

あちゃ……

アレンの順位は四十位。学園でも相当な上位である。

何せ、一年生の九割が百位以下だ。

学園に入ったばかりの平民に追い越されて、貴族としてのプライドがズタズタになっている連中が多い。

闘志を燃やすのはいいが、アレンは完全にクラスの反感を買ってしまったな。

そうなると……ちよつと心配だ。

この試験の合格の条件は、魔物を倒すことではなく、『試験終了時にチーム内で鈴を三つ以上、所持していること』だ。

俺は気になることを質問してみた。

「先生、鈴の譲渡は禁止ですけど、別チームの鈴を奪うことは認められていますか？」

「お、お前……そんなこと、認められるわけがないだろう」

エドガーは面食らった様子だった。

「それを認めてしまうと、譲渡も認めてしまうことになる。何より、危険なダンジョン内で、生徒同士で争うことは厳禁だと何度も教えただろう？ 別チームの鈴を奪った者は即不合格だ」

「ですよ。安心しました」

これなら、アレンが他チームの同級生から鈴を強奪されるようなことは起こらないか……

ただ、ルールには抜け道があるものだ。ジゼルが何か仕掛けてくる可能性もあるし、念のため、アレンが危険な状態に陥ったら、手助けできるようにはしておくか。

「じゃあ、ヴァイス君、試験突破に向けてのレベルアップと、風魔法の奥義の修業、今日もがんばろうね」

セリカがそう言っ、俺の手に自らの手を重ねてくる。

思わずドキッとしてしまう。

っていうか、風魔法の奥義の修業って、要するにセリカのスカートめくりなんだよな。

パンツが見えるか見えないかのギリギリな塩梅になるようにスカートをためかせることで、風魔法のコントロールを上達させる……改めて、どんな修業だよ。

しかも謎なことに、セリカは張り切ってしまっている。

その上、今日からセリカと王宮の同じ部屋で寝泊まりすることになっているんだよ……

「そ、そうだな。エレナと三人でがんばるか！ 頼んだぞ、エレナ！」

とりあえず、周りに二人きりで特訓するわけじゃないと印象付けるために俺はエレナに話を振った。

エレナはセリカの護衛なので、二四時間一緒にいても不自然じゃない。

「はい、兄様！ セリカ様と変な間違いが起きないよう、私が徹底的に監視いたします！」

おいおい、そんなことを言ったら……

「おい、ヴァイス、セリカ様と変な間違いとはなんだ!？」

そんな生徒の言葉に、セリカは自慢げに言う。

「ふっふーん、今日から、私とヴァイス君は同じ部屋で寝泊まりするのよ」

「二、なっ、何iiiiiiiiッ!?」

教室は阿鼻叫喚あびきょうかんの渦うずに包まれた。

「い、いや、護衛のためだ！ エレナも一緒だから、何も問題ない！」

「お前、学園三大美少女のうち二人と、同じ屋根の下で寝るなんて……クソ、どれだけうらやましいんだー！」

「クズヴァイスの癖くせに生意気なまいきだぞー！」

「セリカ様親衛隊としては、そんなことは絶対に容認できん！ 【傾国】のジゼルより、お前の方が危険だ！」

「そーだ！ そーだ！」

男子連中からは、非難囂々ごうごうだ。

「ふふっ、帰りは、夜の特訓のための下着を買って帰ろうね」

「おいっ、それは……！」

セリカが、ぽつと顔を赤らめて、思い切り誤解されそうなことを言ってくる。

「夜の特訓とは、なんだヴァイス!? き、貴様、我らがセリカ様と……！」

「誤解だ、誤解！ シルフィード家の風魔法の修業のために、下着が必要ってだけで！ そうだろ、エレナ!?」

「その通りです。しかし、めくるなら私のスカートにしてください」

「や、やはり、お前は……!? おのれ、クズが！ 試験中は俺たち全員から命を狙われると思え！」

「殺す、ヴァイス殺す！」

困ったことに、アレン以上に俺はクラスメイトからの反感を買ってしまった。

……くっ、せいぜい、気を付けるとするか。

三章 本番

そして、いよいよ。中間試験の日がやってきた。

学園にあるダンジョンの入り口には一年生の生徒、総勢六百名ほどが緊張きんちやうした面持ちおももちで待機している。

俺とセリカとエレナは、急ピッチでレベルを上げ——今やレベル20だ。

試験対策用のコモンスキルを【マスターシーフ】のスキルツリーから習得したし、準備は万全だ。

「エレナ、前に話したように女子チームとは極力接触しないように注意してくれ。ジゼルが偶然を装ってセリカを狙ってくる可能性がある」

学園からの指定で、セリカとエレナは特例として二人だけのチームを組んでいた。他の人間と組

まして、万一その生徒がジゼルだったら大変なことになってしまふからだ。

試験のルール上、俺はエレナ、セリカと協力し合うことができない。女子生徒の中にジゼルがいて、セリカの命を狙っている以上、エレナには大いに働いてもらわなくちゃならない。

「わかりました、兄様」

エレナは素直に頷いた。

「それと、鈴を……念のため四つ手に入れたら、アレンの尾行をしてくれ」

「はい。アレンさんのチームメンバーに、ジゼルの手下がいる可能性があるからですな」

「そうだ。俺をライバル視しているアレンは、俺が守ろうとしたら反発されてしまふだろうけど、エレナが助ける分には問題ないはずだ。任せたぞ」

「わかりました。アレンさんは一度、奴らに襲われてますし、また狙われる可能性は高いと私も思います」

「それに、ジゼルが罫や手下の凶悪なモンスターを潜ませている危険もある。万が一の時は、アレンと協力して、セリカを守ってくれ」

「はい！」

よし、これで作戦会議はバッチリだ。

そんなタイミングで、セリカがおずおずと言う。

「ヴァイス君、大丈夫だとは思うけど……気を付けてね」

「ああ、任せておくれ」

心配そうなセリカを安心させるべく、自信満々な感じで応える。

だが、内心俺も不安がないとは言えない。

今回の試験は、不合格となれば退学という厳しい処分が下される。

これを利用して、ジゼルは俺を退学させようとしてくると読んでいるのだ。

魔族化したギルベルトを倒した俺に、まさかジゼルも真っ向勝負を仕掛けては来ないだろう。おそらく、搦め手的な手段を用いてくるんじゃないだろうか。

「おいヴァイス、ぶっちゃけ、お前一人で楽勝じゃね？　ってか、お前、一人に任せるわ」

「そうそう、ランキング五位様のお手並み拝見ってな」

俺のチームメンバーの二人が、ニヤニヤと笑いながら声をかけてきた。こいつらとは事前に話をしたのだが、まるでやる気がなかった。

『魔物を瀕死にさせて、俺たちに寄越せ』みたいなことしか言ってこないで、話にならない。

だが、そういう態度ならこっちにも考えがある。

「そうだな。俺もその方が助かる」

「あっ……？」

「では、中間試験……始め！」

学園長の宣言と共に、中間試験が開始された。



一年生の全員が、一齐にダンジョン入り口へと殺到する。

「んじゃ、お前らはここで寝ててくれ」

スタートと同時に、俺はチームメンバーの二人の首筋に手刀を叩き込んで、気絶させた。さらに用意していた縄で、グルグルに縛り上げて叫ぶ。

「こいつらはジゼルの手下だ！」

「はあ……!？」

周りが呆気にとられる中、俺は猛烈なダッシュを決める。

「なっ、ヴァイスが速い……!？」

俺は一瞬で、他の生徒たちを抜き去り、先頭に躍り出た。

上位クラス【マスターシーフ】となり、ステータスを【速度】に極振りしている俺に追い付ける一年生は、いない。

ジゼルは十中八九間違いない、俺のチームメンバーを洗脳して、俺の足を引っ張らせ、俺を不合格に追い込むだろうと考えていた。

それを防ぐための措置だ。

ジゼルの手下だと断定しておけば、こいつらを介抱して助けようとする者も現れないだろう。下手に聞われれば、自分もジゼルの手下だと疑惑を持たれる恐れがあるためだ。

無論、あいつらがジゼルの手下だという証拠はない。

正直、協力的な奴らだったらここまで雑な手段は取らず、別の策を考えていただろう。だが、非協力的なチームメイトを抱えていたせいで取り返しがつかなくなってしまうという展開が一番マズいので、リスクを排した形だ。

さすがに冤罪^{えんざい}で退学にしてしまったら可哀想だから、試験が無事に終わるようなら、終了時間ギリギリに助けて魔物を倒させてやろう。

さっそく鈴の音が聞こえる。

俺は鈴を腰につけたゴブリンを見つけるやいなや、拳^{こぶし}で瞬殺した。鈴をゲットすると、今度は別の標的に向かって走る。

鈴の音がするので、魔物を見つけやすくて助かる。

「まさか、一人で鈴を独占する気か!」

「これが【栄光なる席次】五位の実力……ほ、本物だ!」

悲鳴のような声が聞こえた。

俺は開始早々に、三つの鈴を入手した。

「くう……たった一人で勝つつもりなのか、ヴァイス!」

俺と鈴の数を競^{きそ}っているアレンが、悔^くしそうに吠^ほえる。

「そうだ。アレン、お前との勝負、俺が圧倒的な大差で勝つ!」

俺は、アレンを思い切り煽^ほっておいた。

負けず嫌いな奴の性格を考えると、これで闘志は三倍増し。限界を超えた力を発揮してくれるだろう。

まあ俺としては、アレンとの勝負よりも、ジゼル対策が優先だけだな。

これ以上、鈴を集める気も暇もない。

じゃあなぜここまで急いで突入したのか。

それは、このダンジョン内にジゼル側の仕掛けた罠がないか調べて、そのすべてを無効化するためだ。

猛スピードでダンジョン内を駆け回り、【罠破り】スキルで、不審な点はないか調べ尽くす。

教師陣も、ジゼルの罠は警戒しているだろうが、洗脳された者が教師陣にもいる可能性がある以上、警戒し過ぎるということはないはずだ。

この試験が、ジゼルの炙^あり出しを目的にしているのはジゼルも理解しており、攪乱^{かくらん}のためにもず間違いなく、何か仕掛けてくるだろう。

「おっ、やっぱりあったか」

俺は床に仕込まれていた転送罠を発見した。

これはうかつに踏むと、危険な魔物の巣窟^{そうくつ}である地下十階以下にワープせられてしまう凶悪な罠だ。

こんな生徒を殺しかねない代物を学園側が仕掛けるはずもない。これはジゼル側が仕掛けた罠だ。

立ち読みサンプル はここまで

風魔法の刃を叩きつけて、破壊しておく。

「……試験のどさくさに紛れてセリカを殺すつもりか？」

嫌な予感がした。

ジゼルがこの学園に潜伏している最大の目的は、天敵である【聖女】セリカを抹殺すること。

次に将来有望な生徒を支配下に置くか、始末することだ。

試験前に教師が調べて異常はなかったとの報告があった。

ということは転送罫を仕掛けたのは、試験官だと考えるのが自然だろう。

ならば、俺のやるべきことは二つ。

なるべく早く、ダンジョン内を精査して、ジゼルの罫を破壊し尽くすこと。そして、掴んだ情報を女性試験官に伝えること。

そして罫の無効化と報告が終わったら、どこで何が起きてもすぐに駆け付けられるように地下二階で待機するとするか……

今の俺のスピードなら、ジゼルが一から三階のどこに出現しても五分以内には駆けつけられるはずだ。

さて、ジゼルはどう出るかな？

そう思いつつ、しばらく見回りをしていると三叉路で若い女性教師——レティシアと遭遇する。

「あつ、ヴァイス!?」

レティシアは俺の顔を見るなり、慌ててスカートの裾を押さえた。転生前の俺は、スカートめくり常習犯のクズ貴族だったので、この反応は……まあ致し方ない。

「先生、危険な転送罫が、この先にありました。壊しておいたので、確認してください。試験官にジゼルの手下がいます!」

「は……? え……?」

要点だけを伝えたので、理解が追いついていないようだが、足を止めている暇はない。

俺はパトロールに戻った。

原作ゲームの主人公アレンは、なぜか生徒たちだけでジゼルに対抗しようとしたが、俺は使えるモノはなんでも利用する主義だ。

そうでなければ、俺の愛するエレナやセリカを守り切れないからな。



僕——アレンはパーティーメンバーと共に、最も魔物の出現率の高い地下三階にやってきていた。この五日間、僕はギルベルト先輩と共に学園ダンジョンに入り浸り、レベル14にまで成長していた。

もはや地下三階以内に出現する魔物は、僕の敵ではなくなっていた。